ファーザーズ・イメージ

Shinpei Tokiwa

常盤新平

ファーザーズ・イメージ

Shinpei Tokiwa

常盤新平

毎日新聞社

ファーザーズ・イメージ

一九九二年八月二五日　印刷
一九九二年九月一〇日　発行

著者　常盤新平
編集人　深瀬正頼
発行人　戸田栄輔
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇-五一　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　精興社
製本　大口製本

落丁・乱丁本は小社でおとりかえします。

© Shinpei Tokiwa printed in Japan 1992
ISBN4-620-10457-4

目

次

汝の父 7
最初の記憶 20
一病息災 31
風呂と床屋 41
父の葉書 51
三等車の男 61
重い布団 71
兄弟再会 81
架空の対話 91
ステッキとカンカン帽 101

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

煙草の害　111
おふくろの味　121
インヴァネス・インバネス　131
わが町　141
表の顔　151
お地蔵さん　161
父の友人　171
父の死　182
穏やかな表情　192
あとがき　210

装画　吉原英里
装幀　菊地信義

ファーザーズ・イメージ

汝の父

馬名に惹かれて、馬券を買うことがある。馬名を嫌ったばかりに、馬券が外れることもある。カツトップキング——勝つ1等帝王——などという馬は、勝つとわかっていても、馬券は買いたくない。一体、この馬主はどんな田吾作かと失敬なことを考えてしまう。欲丸出しではないか。

しかし、馬名の好き嫌いで馬券を買うのはおとなげないとも思う。馬名にこだわるから、競馬で損ばかりしているのだ。カツトップキングの馬主は祈るような気持で最高の命名をしたのかもしれぬ。意外や稚気あふれる老紳士かもしれない。競馬は馬主ではなく馬が走るのだ。

二年前の春先だったか、ニューヨークに行ったとき、「ジャパン／ニューヨーク」という隔月刊の邦字雑誌を発行する中屋道さんがアケダクト競馬場に案内してくださった。同行した、アメリカの競馬に詳しい福浦好明氏に専門紙「レーシング・フォーム」の読み方をおそわったのだが、どうしても理解できなくて、競馬場がくれた出馬表を頼りに、もっぱら単勝馬券を買って、レースを見た。気に入った名前の馬を狙ったのである。

第五レースか第六レースに“TRUTH BE TOLD”という馬が出走してきた。これは買いである。

父親に嘘ばかりついてきた息子としては罪滅ぼしに、「真実を告げよ」ならどうしても買わなければならない。

それまで各レース、十ドルずつ単勝を買っていたので、トルースビートールドも十ドルにした。驚いたことにこの馬が直線で伸びてきたのである。十ドルが五十何ドルかになった。馬名で馬券を買っても当るのだから、競馬は神秘的な遊びである。

四十を過ぎて競馬の楽しさを知り、府中の東京競馬場へ土曜日ごとに通っていたころ、ファーザーズイメージの子供が走っていた。父親がファーザーズイメージであれば、その馬の単勝を買ってみた。“FATHERS IMAGE”という名前が好きだったのだ。こういう名前をつけた馬主に敬意を抱いた。訳せば「父の姿」になろうか。

「シグネチャー」編集部から『サラブレッド血統事典』(二見書房)に出ているファーザーズイメージの部分のコピーを送ってもらった。以下、主なところを抜き書きしてみる。

「栗毛。1963年アメリカ産。1971年輸入(アメリカ)。1978年死亡。▼競走成績　アメリカで3〜5歳時20戦6勝。獲得賞金173、318ドル。▼血統　父スワップス、母コスマー。▼主な産駒　ハワイアンイメージ(皐月賞)、ホッカイノーブル(ステイヤーズステークス)、エリモファーザー(毎日杯)、アスキットクイン(ニューイヤーカップ)、アジャストメント(新潟・東北サラブレッド大賞典)」

種牡馬としてのファーザーズイメージとその産駒の特徴は以下のごとし。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「近親にノーザンダンサーのある良血で、ハワイアンイメージ、エリモファーザーなどを出してかなり成功している。いかにもスワップス系らしい一本調子のレースをして、どこまでいってもばてないし、スピードも衰えないというレースをする仔が多いが、勝負強さはなく、接戦になると強くない。力の限界があるが、産駒はコンスタントに走るし、タフでダートコースや重馬場にも強い。仕上がりは早い方だが、使われてよくなるタイプで、2、3戦目から本格化する。高齢まで長く活躍できる有能な競走馬を出す血統である。距離は2000メートルぐらいに向いており、短距離、長距離もそれなりにこなせる。特に我慢強さの優れた有能な種牡馬で、闘志も旺盛だ。母の父としても確実に良い仔を出すタイプ」

ファーザーズイメージ産駒の馬券を買っていたころ、この馬について何も知らなかった。ただ、種牡馬としては二流ではないかとぼんやり思っていた。いま、『サラブレッド血統事典』のコピーを見て、二流というのは間違っていなかったようである。

二流だったからといって、ファーザーズイメージに私が失望することはない。もともと、マイナー・ポエット（二流作家）が好きだ。拙訳のあるアーウィン・ショーというアメリカの作家も二流だったと思う。一流だったら、ほかの人が翻訳していただろうし、おそらく私もこの作家に熱をあげることもなかった。

ファーザーズイメージも二流だったから、好意を抱いたのかもしれない。それは親近感といってもよさそうだ。このサラブレッドの特徴が「一本調子のレースをして、どこまでいってもばて

ないし、スピードも衰えない」ところなど、私自身のことを言われているような気がする。

また、「勝負強さはなく、接戦になると強くない」というのも、俺のことじゃないかと頭を抱えたくなる。この「強くない」というのは「弱い」のとはちがうはずだ。強くはないが弱くもないのがそれこそ二流の特徴ではないか。

ファーザーズイメージについて右のようなことがらを知ったとき、私は、二流の男の小伜が二流の種馬の子供たちの馬券をせっせと買っていたのに気がついた。彼は八歳で日本に来て、その七年後には死んでいる。種牡馬としては残念ながら短命だった。

ファーザーズイメージの産駒は父親と同じようなレースをしていたのだ。一本調子で、ばてなくて、スピードも衰えず、そのくせ、勝負強くはないので、追って届かず、逃げると差され、競りあうと負ける。

ファーザーズイメージの仔でなくても、こういう馬がよくいる。せめて二着に残ってくれればいいものを、たいてい首差か頭差の三着か四着である。それで複勝を買おうとして、予想配当を見ると、意外に安い。しかし、そのような馬がいてこそ、競馬が成り立つ。二流の馬が実は競馬をおもしろくしている。

私の父は頭がよくて勤勉でせっかちで、家では威張りくさっていた。一生、刻苦勉励だったが、しょせんは二流三流の人だった。それも息子から見れば、二流まで這いあがってきた無名の人で

ある。

この父を私は嫌っていた。私自身に子供ができるまで、父のような男にはなりたくないと思っていた。そのせいか、父親と息子がイチャイチャしている光景のＴＶＣＦを見ると、背中がぞくぞくしてくる。

子供のころから私は父親のことを恥かしく思っていた。恥かしくなった原因の一つは、父の立小便である。小学生だった私が夕方まで原っぱで遊んでいると、夏であれば、カンカン帽に薄いクリーム色の麻の背広、そしてステッキをついた父が帰ってきて、空地の前でかならず立小便をした。それが毎日の習慣だった。

おしょすいよ、と母に訴えたことがある。おしょすいというのは恥かしいという意味の東北地方の方言である。私がものごころついたころには、仙台に住んでいた。父は仙台税務監督局の資金課長を長くつとめた。

しょうがあんめい、父ちゃんはしょんべんが近いんだからと母は弁護した。夫の立小便など、夫の女好きにくらべたら、母にとっては簡単に許せることだったろう。

ファーザーズイメージの子供が父親そっくりの走り方をするのは、血統である。遺伝である。父の頻尿は私に遺伝した。子供のころから私は小便が近かった。

父がステッキを小脇に抱え、下腹部を突きだすようにして、小便をしていた姿が記憶にある。しかし、私といっしょに遊んでいた、近所の子供たちは誰もそれを怪しまなかった。その近所の

人たちのごく普通の行為だったのである。

電柱や家の門の前や塀に「立小便を禁ず」という立札が出ていた。これはいかに立小便が多かったかを裏書きするものだろう。父の立小便を恥かしいと思っていた私もしばしば電信柱に小便をひっかけていたのである。

数年前、大統領だったリンドン・ジョンソンのごく短い評伝を翻訳したとき、このテキサス男もよく立小便をしたことを知った。テキサスの自分の農場でも所かまわず堂々と放尿していたし、大統領になってからは、ホワイト・ハウスの芝生で傍若無人に立小便をしてＳＰ（秘密警察）につかまっている。このくだりを翻訳するとき、私は父を思い出して、力がはいった。

父は、私が幼いころから抱いていた恥かしさを一身に背負ったような人だった。恥かしさのシムボル。私が感じた恥かしさをたとえば絵にすると、父の姿になっただろう。

父の禿頭も恥かしかった。禿そのものを恥かしく感じたわけではない。私が小学生のころは、まだ髪が残っていて、それがなるべく多く見えるように苦心していた。しかし、はたから見れば、父の頭は黒い簾（すだれ）みたいだったのである。

朝、父は母に髪の手入れをさせていた。椿油をつけて、頭をマッサージするのだが、そうすると、毛が抜けるのはやむをえない。

その抜け毛を大事そうに手にとって、父は母をどなりつけ、ああ、いたましい（惜しい）と痛恨の叫びを発するのだった。母は笑いたいのをこらえ、私は笑った。

私が中学か高校のころには、父の髪はまったく消えてしまい、すると、こんどは頭をきれいに光らせることに腐心した。卵の白身で母に頭を磨かせたのである。そのせいか、父の頭はいつも薄い桃色に輝いていた。

父の頭が禿げているのを私が恥かしがったのではない。抜けおちた一本の髪を恨めしそうに眺めたり、卵の白身で頭を磨くというのが恥かしかったのだ。けれども、それは、父が外では見せなかった「顔」である。

昭和二十年七月九日から十日にかけての空襲で焼土になる前の仙台は、東一番丁だったかに三階建木造の西内楽器店があったりして、緑の豊かな、古風な落ちついた町だった。まさに杜の都である。私たちが住んでいたのは北五番丁の、宮町に近いところで、当時は仙台市のはずれだったと思う。なにしろ、北のほうへ十分も歩けば、仙山線の向うに営林署があり、小さな沼で釣針をたらすと、餌もつけてないのに、泥鰌(どじょう)が食いついてきた。

家の近くにお化け屋敷という原っぱがあった。相当な広さで、七百坪から千坪はあったろう。道に沿って土手があり、奥のほうに廃屋があり、まわりに雑草が生い茂っていた。私たちはそこで戦争ごっこや隠れんぼをしたのだが、夕方になると、この空地と北五番丁という通りをへだてた杉山通の角に父が現われ、私を見つけると、うれしそうににっこり笑い、それから背中を向けて、立小便をするのだった。

その北五番丁は舗装されていなかった。自動車が通ることはめったになく、道にひからびた馬

糞やまだ湯気のたっているのが落ちていた。農家が馬車を引いて、糞尿を集めてまわっていたのである。

道路で三角ベースの野球ができたし、冬には雪が積もると、竹に鼻緒をすげて滑った。竹はお墓で花を生ける竹筒をかっぱらってきて、それを二つに割り、割った部分を下にして滑るのだった。小鳥の好きな四番目の兄は北五番丁の道幅いっぱいに霞網を張って雀をつかまえた。雀はおもしろいように霞網にひっかかった。兄は四十雀(しじゅうから)を狙っていたのだが、四十雀は霞網のほうへ降下してくると、直前で霞網に気づいて逃げていくのだった。

秋は、となりの北村さんの家の無花果(いちじく)の枝が塀ごしに伸びていて、その枝に実ったのをもぎとって食べた。母が果物を買うのを見たという記憶がない。りんごも梨も季節になると送られてきた。苺(いちご)は、小鳥の好きな兄と五番目の兄が苺園に忍びこんでかっぱらってきた。見つかって、よく追いかけられたそうだ。その苺園の娘がのちに私の三番目の兄と結婚している。苺園は仙山線の向うの丘の上にあった。

東一番丁の三越へ父に連れていってもらったことがある。文房具か玩具を買ってくれるというのだった。売場で私が、これが欲しいと言うと、父は大声を出した。

「なんだ、こんなものが欲しいのか！」

私はとたんに恥かしくなった。こんなものが欲しいのかとどこの売場でも父は叫んだ。結局、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com